

児童は何故テレビを見るか

——メディア行動を予測する変数について——

布 留 武 郎

児童のテレビ視聴行動については、内外における多くの調査研究によってだいたい次の点があきらかになっている。⁽¹⁻³⁾

(1) テレビの視聴習慣は3才頃にできあがる。(2) 成長するにつれて視聴時間が増加し、10台の前半期を頂点として、後半期にはいると下降する。10台の後半は一時的にテレビから遠ざかる時期である。成人期にはいると再びテレビに近ずき、視聴時間は少年期のそれより多くなる。(3) 10台の前半にメディア行動(media behavior)の“転換点”(turning point)が存在する。メディア行動の転換点とは、Schramm・Lyle・Parker(1961)の指摘した現象で、読書能力がまだ発達せず、テレビがほとんど唯一の情報源である時期においては、知能の高い児童は低い児童に比べてテレビをよく見るが、読書能力が発達し、一定の成熟段階に達すると、この関係が逆転することをいう⁽⁴⁾。この時期にはいると知能の高い児童にとってテレビは彼らの知的要求を満足させてくれないので、印刷メディアを選ぶようになる。(4) そのような時期にはテレビから印刷物への移行ばかりでなく、テレビ番組にたいする好みもまたかわり、性による好みの分化が顕著に現われる。

児童の視聴行動にみられる上記の現象は日米の文化の相違をこえてほぼ共通にみとめられる。年齢と性、特に成熟の指標となる年齢は児童の視聴行動を予測する重要な変数であるが、児童の視聴行動を予測する変数として、ほかにどのような要因が発見されているか？

変数間の交互作用

この点に関して、内外の諸調査は児童の知能、所属する社会階層あるいは父の職業、父母の学歴、居住条件その他さまざまな特性と視聴行動との関係をしらべている。⁽⁵⁻¹³⁾ しかし諸調査の結果は必しも一致しない。これについては二つの解釈が可能である。

一つは、指標として使用された特性に妥当性があったかどうかという点であり、もう一つは、視聴行動にはさまざまな要因が網の目のようからみ合っていて、個々の特性との相関を求めるだけでは解釈できないということである。

前者についてアメリカの社会学者たちは1950年前後からコミュニケーション行動に関係する特性として、従来の人口統計学的要因よりもっと有効な社会心理学的要因を見つける努力をしてきた⁽¹⁴⁾。それにもかかわらず、テレビと児童に関する調査の大部分は依然として、年齢、性、社会階層といった人口統計学的特性にたよっていたことを指摘せずばなるまい。静岡調査(1957—59)では種々の知的能力、性格特性を指標にとりいれ、とくに第二次の調査(1959)では、仲間集団、親子関係などにも着目しているが、その指標としたカテゴリーに欠陥があったと思う。アメリカの学者たちが有効な指標として見いだしたダイナミックな社会関係をとらえることができなかったのである。

第二次静岡調査では受け手に関する16の特性と14の視聴番組タイプとの関係をしらべているが、番組タイプをこのように細分した限りでは、一様な現われかたをする特性はほとんど一つもなかった⁽¹⁵⁾。けれどもこのことは特性の選択あるいはその指標カテゴリーに欠陥があったというよりも、むしろ特性間の交互作用にあまり注意を向けなかったということに原因があったと思う。

同調査において視聴時間量と諸特性との関係にはいくつかの有意性がみとめられたが、主要な変数と考えられた知能との間に相関がみとめられな

かったのは予想外の結果であった。知能偏差値と視聴量との関連は線型で、相関係数は小学5年.004, 中学1年.021 にすぎなかった。この調査は標本も大きく、視聴量も綿密な手続きのもとに求められており、信頼度の高いものである⁽¹⁶⁾。

しかしこの第二次調査は静岡市にテレビが開設されてから2年余、普及率約30%のとき行われたもので、標本の中にはテレビ購入後6ヵ月未満の家庭の児童もかなり多数含まれていた。そこで学年男女別に4つのサブ・グループを作り、テレビ所有期間と知能との交互作用による視聴量の差をしらべると、小学5年男子と中学1年女子との間にパタンのちがいのあることがわかったのである。すなわち、小学5年男子についてみると、テレビ所有期間が1年半の切断点までは知能と視聴量との間に有意な相関はない。しかし1年半をすぎると、知能の低い集団では視聴量の減少がいちじるしく、知能の中位あるいは上位の集団より有意に少なくなる ($p < .05$)。

これにたいして、中学1年女子では6ヵ月までは知能と視聴量との間に有意な相関はないが、6ヵ月～1年6ヵ月の期間において、知能上位と中位の集団間に有意差 ($p < .05$) があらわれ、その差は1年半を過ぎた後も維持される。この場合小学5年男子とちがって、知能上位群のほうが視聴量が減るのである。この事例ではそれほどはっきりあらわれていないが、視聴量の大きさには少くとも接触期間、年齢、性、知能の要因がからみあっていることを暗示している。Schramm *et al.* (1961) は前述のように小学6年頃までは知能の高い児童もよくテレビを見るが、上級学年になると知能の高い児童はそれほど見なくなることをあきらかにしている⁽¹⁷⁾。上記静岡調査のデータも接触期間1年半以上の切断点でみると、かなりよく似た傾向をよみとることができるのである。このようにテレビの視聴行動の背後にあるものを探るためには、年齢とか、知能とかいう単独の特性よりも、むしろ諸特性間の交互作用に眼をむけたほうが実りの多い結果がえられるように思われる。

動因を頂点とする社会的変数のハイラーキー

また、年齢といい、知能といい視聴行動を動機づける直接の作用因 (agents) ではない。性格とか先有傾向とか、あるいは対人関係とよばれる変数にしても同様である。視聴行動の背後には、心理学で動因 (drive) あるいは動機 (motive) とよばれるものを頂点として、心理学的、社会的要因が網の目のように連鎖しているハイラーキーの存在が想像される。このような構想はかなり早くからアメリカの社会学者たちの頭の中にあつたように思われる。問題はいかにして有効な操作しうる変数をみちびきだすかということであつた。それには散発銃的な探り調査でなく、理論モデルの先導が必要となる。

私流にいえば、児童のメディア行動に関して、このハイラーキーの一角に挑戦した先駆者は Riley, M. W. & Riley, J. W. Jr. (1951)^(18~20) である。マスコミ研究者によってしばしば引用されるこの有名な研究例を紹介するのはさしひかえよう。ただここで言いたいのは、児童は何故冒険活劇を好むかという問題にたいして、児童に直接たずねるという方法のほか、メディア行動とは無関係な間接の質問とメディア行動とを結びつけるという接近方法をとっていることである。彼らは“集団成員性” (group membership), “準処集団”(reference group), “緊張”(strain) というような社会的概念を操作可能な変数としてとらえ、これらの変数はメディア内容の選択に関連があることを示した。そしてこのような特性の差から、同じ攻撃的メディアにたいしても、それを逃避の手段として使用する群と“社会的有用性”(social utility) の故に使用する群とが技わかれして、選択認知が行われることを示唆したのである。この研究の基調には、個人の意見は彼がおかれている社会構造から予測できるという知識社会学の知見があつた。そして青少年期においては両親と仲間がもっとも重要な集団であると考えられたのである。

ところで、“緊張”とは学校の成績、勉強、手伝、趣味について両親の

抱負 (aspiration) が高すぎて、子どもがついていけないと感じている状態のことである。このような状態におかれている児童は欲求不満から攻撃的になり、現実世界では満たされぬ不満を解消するために、愉快的動物や野性的な西部劇の英雄が活躍する空想メディアを志向する。Maccoby, E. E. (1954) もまた両親にたいして緊張状態にある中流家庭の児童はテレビの視聴時間が長いという事実を欲求不満-攻撃仮説によって説明し⁽²¹⁾, Bailyn, L. (1959) はそのめんみつな研究によって児童がテレビに主として求めるものは逃避であると結論している⁽²²⁾。のちに行われた Schramm *et al.* (1961) の研究においても、この考え方はうけつがれている。彼らはメディア行動を空想志向 (fantasy oriented) と現実志向 (reality oriented) にわけ、前者を代表するメディアとしてテレビを、後者のそれを印刷物と規定する⁽²³⁾。しかしテレビのみを見て読書しない児童はめったにいないし、その反対の場合も同様である。そこで印刷メディアに普通以上接するものとしからざるもの、テレビを普通以上見るものとしからざるものというふうにそれぞれを上下に2分し、その組合せによって、メディア行動を4つのパターンにわけ、そしてテレビ大・印刷小の行動パターンを空想志向、テレビ小・印刷大の行動パターンを現実志向と定義する⁽²⁴⁾。

空想志向は快感の原理に支配され、明日のための糧よりも即時の満足を欲する行動であり、現実志向は現実の原理に支配され、今日の快樂よりも明日の報酬を欲する行動である。このような行動傾向をもつにいたる作用因として家庭の生活信条の内面化と対人関係にもとづく欲求不満状態の二つに注目する。前者の要因を社会規範 (social norm), 後者の要因を社会関係 (social relationship) とよび、次のような仮説のもとに調査を行なった⁽²⁵⁾。

空想志向のメカニズム

児童は対人関係の葛藤にたえずさらされることにより、欲求不満状態におかれ、そのため攻撃的傾向が形成される。攻撃感情のはげぐちの一つの

通路として空想メディアへの逃避がおこる。(現実生活における罰をともなう直接行動より、はるかに安全だからである。)

調査の手順をわかりよくするために対人関係の葛藤をC、欲求不満-攻撃をA、空想志向行動をFであらわすと、Sehramm *et al.*の接近方法は次のようになる。

(1) A×Fのテスト (2) C×Fのテスト (3) C×Aのテスト

欲求不満-攻撃(A)と空想志向行動(F): Seas, R.の考案による攻撃性テストを簡易化したものを使用し、6年生、10年生について、前記メディア行動の4つのパターンとの関係をしらべると、6年生では6種類の攻撃型のいずれにおいても、4群間に有意差はなかった。しかし10年生では、空想志向群は反社会的攻撃性(antisocial aggression)において他の3群より高い得点を示し、一方、現実志向群は4群中、反社会的攻撃得点をもっとも低く、同時に攻撃不安(aggression anxiety)では最高点を示した。すなわち仮説は6年生では証明されず、10年生において立証されたのである。

反社会的攻撃性とは、例えば“ティーン・エージャーのなぐりあいを特にわるいことだとは思わない、それは彼らの問題であって大人が介入すべきでない”といった意見に賛成することであり、攻撃不安とは、例えば“二人の友人がなぐりあいをしているのを見ると不愉快になる”といった意見に賛成することである。

対人関係の葛藤(C)と空想志向行動(F): Cの指標として、職業、進学、宿題に割く時間について、親ないし友人の抱く期待と自分の望みとの間に、くいちがいがあるか否かをたずねる。くいちがいの大きいほど葛藤がつよいと仮定する。特に親の期待・抱負が自分の望みより高い場合に注目する。求められた得点をメディア行動の4つのパターンについて比較すると、6年生では有意差なく、10年生に有意差がみとめられた。すなわち、10年生においては両親との間に葛藤があると感じているものが空想志向群にとくに多いことが証明されたのである。

ところで、 $C \times F$ 、 $A \times F$ の関係において仮説を支持する結果が6年生ではあまりはっきりあられず、10年生においてははっきり出てくるのは何故か？それは6年生ではメディア行動がまだ十分に分化していないためであり、また学校、友人、両親からの圧力も大きくないからであるとの著者は考えている。

対人関係の葛藤（C）と欲求不満-攻撃（A）：親子間の葛藤と攻撃性との関係を前述の指標によってみると、攻撃不安は葛藤のつよい群ほど得点が低く、反社会的攻撃性は葛藤のつよい群ほど得点が高くなる傾向がみとめられた。特に後者の関係は目立っており、葛藤のない群と葛藤のつよい群の間にはいちじるしい得点差（30%）があったと述べている。

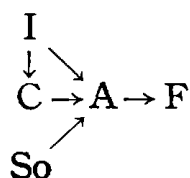
このような手順によって、 $C \times A$ 、 $A \times F$ 、 $C \times F$ の関係にそれぞれ相関のあることを示したのであるが、そこには相関があるといえるだけで、因果関係については何も言えない。因果関係をあきらかにするためには、C、Aの変数を実験的に統制してFをみちびき出さねばならない。しかし心理学的解釈として、 $C \rightarrow A \rightarrow F$ の過程を考えることは許される。FはまたCの作用因となって対両親との葛藤をますますつよめるという不断の相互作用の存在が予想されるわけである。

また原著者のいうように、これらの関係には、いつも他の特性が等しければという条件がつきまどっている。ところが実際には、そういうことはめったにない。そこでできるだけ多くの変数の組合せによる分散分析が要請されるのであるが、実際には、サンプル・サイズの都合上などから困難である。Schrarmm *et al.*は、社会経済的地位、知能のそれぞれを層化して、各層の間に上記の関係がどのようにちがってあらわれるかをしらべている。

社会階層と知能の効果：社会経済的地位を4階層にわけ、一方対人葛藤を3段階にわけて、攻撃性の測度の分布をしらべると、どの階層においても葛藤のつよい群ほど高い反社会的攻撃性を示すものが多いが、この傾向は特に上層階層においていちじるしいことが見出された。

また知能の低い群では高い群より対両親との葛藤をもつものが多いこと、そして社会階層の低い家庭の児童、あるいは知能の低い児童においては、対人葛藤をあまりもたない場合でも、つよい反社会的攻撃性をもつものが多いことが発見された。反社会的攻撃性は空想メディア志向の作用因となるのであるから、社会階層の低い場合、あるいは知能の低い場合はそれだけでテレビの重視聴者となる傾向をもつわけである。

いま社会階層を So, 知能を I であらわすと、さきの図式は次のようにかきあらためられる。



社会規範の効果 : Schramm *et al.* の調査において間接的接近方法により成功したもう一つの例として、社会階層→社会規範→メディア行動の関係をあきらかにした研究がある⁽²⁶⁾。彼らはロッキー山脈地域の調査において、社会階層の低い家庭の児童は高い家庭の児童に比べてメディア行動が空想志向に傾くことが多いことを見出した。この差は6年生ではまだそれほど明瞭にあらわれないが、10年生でははっきりとあらわれる。10年生における空想志向（テレビ大・印刷小）と現実志向（テレビ小・印刷大）の比率は次のように上層と下層で逆の関係を示すのである。

	10年生上層	下層
現実志向	32 %	21%
空想志向	16 %	29%
差	16	-8

社会階層によってメディア行動がこのようにちがうのは、家庭の社会規範が内面化され、作用因となっているからにちがいない。そこでのちのデソバナー調査ではこの仮説を証明するために、社会規範の指標として、現在と未来の生きかたに関する三つの命題からなる質問を設け、これを尺度化して、社会階層及びメディア行動との関係をみたのである。

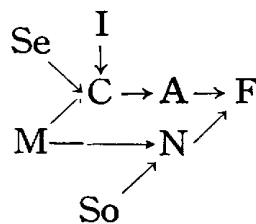
その結果、社会階層と未来志向得点の間には有意な関係は見られなかったが、平均得点は階層が上中下と低くなるほどさがるという傾向がみとめられた。またメディア行動と未来志向得点との関係については、未来志向得点が中央値より低いものは空想志向群にもっとも多く、未来志向得点が中央値より高いものは現実志向群にもっとも多いことがわかったのである。

未来志向得点

	中央値以下	中央値以上
空想志向群	69%	31%
現実志向群	17%	83%

メディア行動の他の2群（多使用者，少使用者）の得点の分布は上の2群のちょうど中間に位置している。メディアの多使用者（high users）とはテレビ・印刷ともに中央値以上の使用者，少使用者とはテレビ・印刷ともに中央値以下の使用者をいう。この両者の特性は6年生と10年生とではいちじるしくちがっている。多使用者は6年生では，4群中最多数であり，知能も平均して最も高い。進学，職業にたいする抱負も高く，健全な新聞記事の読者であり，マンガ本はあまりよまない。これにたいし10年生では多使用者は6年生の半分位に減り，知能は平均以下でしかも進学，職業への抱負は高い。高い抱負は知能が低い故に実現されず，学校にあまり興味をもたない。マンガ本をよくよみ，テレビに依存するという点において空想志向群と似た特性をもっている。

そこで，社会規範の要因をNの記号であらわし，またメディア行動と関連して，データのうらづけのある年令をM，性をSeであらわすことにすると，さきの図式はさらに次のようにあらためられる。



この図式は筆者が再構成したものであるが，先述のようにこれらの変数

間の関係は相関があることを示すだけで、因果関係については断定できない。しかし、心理学的解釈としては矢印の過程を承認することができると思う。例えば、対人葛藤の大なるものは欲求不満-攻撃性が高く、空想志向行動にかりたてられ、手近かのテレビに逃避する。知能の低い児童は高い児童より対人葛藤をもつものが多い。年長児は年少児より、また男子は女子より対人葛藤をもつものが多い。低い社会階層に所属する児童は即時報酬型 (immediate reward) の社会規範をもつものが多い、空想志向になるといった具合である。

社会階層、社会関係、年齢、知能というような要因は児童のメディア行動を予測する重要な変数であることがわかったのであるが、これらは直接の作用因でなく、これらの社会的変数のからみ合いによって生じる動因が児童を空想志向にかりたてたり、現実志向にむかわせたりするのであると考えられる。

批判：空想志向の二つの側面

いままでは、空想志向行動の動因として、逃避的側面に焦点を合せて論じてきたのであるが、非逃避的側面についても考えてみる必要がある。Rileys は同一の空想内容にたいしても、仲間集団の価値観に同調しようと努力している児童 (seekers) はこれを集団活動に有用な道具として使用していることを示唆し、かかる動因を社会化された動因 (socialized drive) とよんでいる⁽²⁷⁾。Schramm *et al.* は児童がテレビを見る理由を (1) 受動的なたのしさ (passive pleasure) (2) 知識のかくとく (偶然学習) (3) 社会的有用性 (意図的学習) の三つに分類し、(2) は (1) よりずっと少なく、(3) はさらに少ないという⁽²⁸⁾。

児童のテレビ視聴の大部分が空想志向であるということは、テレビ視聴によつておきかえられるメディア行動が、マンガ、娯楽的読物、ラジオ、映画であるという事実から承認することができる。しかし空想志向と受動的なたのしさとが同義語として使用されているところに問題があるように思

われる。“受動的たのしさ,,とは、空想の中で代理的役割を演じたり、現実生活の問題から逃避したりすることを意味している⁽²⁹⁾。もちろん児童のテレビ視聴には現実からの逃避という場合がしばしばあることは疑いないが、児童の空想志向はもともとそのような自己防衛的メカニズムによるものでなく、本質的には正常な活動ではないかと思われる。

少年期は活力にみちあふれ、好奇心に富み、あれもこれも見たい聞きたいという時代である。Schramm *et al.*はこの現象をマスコミ使用における“ふくらみ”(bulge)とよび、6年生頃におけるメディア行動の特色として強調しているのである⁽³⁰⁾。彼らは親の保護のもとにあって、学校、社会、両親の拘束もゆるやかで、社会規範はまだ十分に内面化されていない。自由にのびのびと育つ時代であるとともに、一方では内的成熟につれて興味の対象がひろがり、想像力も発達していく。少くとも、ある年代の正常な児童にとっては、空想は想像力を促進する作用因であるように思われる。彼らにとっては空想すること自体がたのしいのであって、良心の苛責を感じることなくテレビに熱中することができるのである。Schramm *et al.*はこの少年期の特色を一方では認めながら、空想志向の逃避的側面のみに注目してメディア行動のメカニズムを追求しているといえよう。

正常な空想志向のメカニズムを直接立証するデータはないが、間接的データはいくつかそろっている。たとえば、Schramm *et al.*の調査において、6年生は10年生に比べると、対両親との葛藤をもつものが少ないのにもかかわらず、テレビを見る時間は長いのである⁽³¹⁾。この事実は空想志向行動には単なる逃避以上のものがあることを物語っている。また彼らのカナダにおける調査において、テレビ視聴が児童に有益な知識をもたらすのは、読書前期の3才から8才ぐらいまでであろうと述べ、小学1年生と6年生との比較によってそれを実証している。そして偶然学習の成立条件として、注意をひくような新しいことがらであること、現実的にみえること、同一視しやすいことなどをあげ、読書前期の年少児にとってテレビは独占的な情報源であるといっている⁽³²⁾。このことは、うらがえせば、あ

る時期の児童はテレビ視聴に非常な興味を示し、不知不識に様々な知識を学習するということである。

また、“転換期”以前ないしその時期にはいりかけた児童を対象としたイギリスの調査や静岡調査において、研究者が予想したような行動傾向に及ぼすテレビの悪影響はほとんどみられなかったことも、間接ながら、筆者の推論の妥当性をうらがきしているように思われる。何故なら、もしもテレビが、現実の問題からのがれ、空想世界に逃避する場として使用されることが多ければ、それによって受動的、逃避的行動傾向が促進されるであろう。しかしそのような証拠は一つも見出すことができなかったからである^(33,34)。

逃避的空想志向を“受動的たのしさ”とよぶならば、非逃避的空想志向を“能動的たのしさ”(active pleasure)とよんでよいだろう。Mac-coby, E. E. (1954)は空想の機能として、現実生活の制約からの自由、気晴し(distractor)、願望充足(wish-fulfillment)の三つをあげているが⁽³⁵⁾、いずれも空想志向の逃避的側面に注目したものである。アメリカの心理学者には精神分析学の影響が多分にしみこんでいて、それが社会科学の発展に大きな貢献をもたらしていることは否めないが、その反面、すべてを病理学的に解釈しようとする傾向がつよすぎるように思われる。

では正常な空想志向とは何か。この問いに答える準備は残念ながらできていない。そこでこの問題を“興味”という観点から考えてみることにする。興味という言葉は教育上しばしば使用される重要な概念であるが、その概念構造はあいまいである。心理学的記述では、“興味“のかわりに、欲求、動因、動機、構えなどという用語がしばしば使用される⁽³⁶⁾。これらの概念のほうがもっと適確に現象を記述することができるからである。しかし“興味”は日常親まれている言葉で、漠然とはしているが、それだけにかえてわかりよい言葉である。単語としては多義的であっても、日常生活の文脈の中ではほぼ共通した意味を伝えることができる。

ここでは考えを進める都合上、次のような仮りの定義をしておこう。興

味とは、対象志向の動因であり、比較的つよい情動をとめない、認知の発達と密接な関係があつて、認知と興味とは相互促進的に作用する。いままで興味のなかつた対象も、対象の認知が構造化され、理解できるようになると興味が生じる。ある対象にひとたび興味が生じると、認知構造の分化がおこり、理解が深まるようになる。同時に汎化の原理にしたがつて興味の対象がひろがる。

筆者はさきに視聴行動の背後に“動因”を頂点とするハイラーキーを想定し、空想志向の動因の一つとしての逃避的側面に言及したのであるが、すでにあきらかなように、逃避的・非生産的動因のほかに、生産的・創造的ともいふべき動因を頂点とするハイラーキーもまた存在することが予想される。それは Rileys が西部劇をみききする動機の一つとしてあげた社会的有用性 (social utility), あるいは社会化された動因 (socialized drive) とは性格を異にする。後者には仲間集団の遊びに利用したいという意図的構えが内在するが、前者はただみききすることがたのしく、それによって認知や想像力の発達が自然に促進されるという意味をもっている。

おそらく空想志向型のメディア内容がそのような機能をはたす時期は、幼児における最初の接触からはじまって、せいぜい長くて“転換点”までであろう。はっきりしたことはわからないが、小学校5・6年頃に空想志向における積極性から消極性への変化がはじまるのではないと思われる。第二次静岡調査において、「いま見ているくらいでちょうどよいと思うか」、それとも「見すぎていると思うか」、「もっと見たいと思うか」という質問にたいして、「見すぎている」と答えた児童が5年生で22% (中学生は31%) あつた。その大部分は、ねむくて朝起きられないとか、勉強時間をとられるとかいう理由をあげている。つまり、夢中になつてつい度をすごすということであるが、「ほかのことができないから」と答えた児童が17% (中学生26%) いる。また「きれいな番組でも見る」児童が小学5年生には60% (中学生47%) もいて、その理由の一つとして「ほかにすることがない」

と答えたものが27%（中学生30%）いる⁽³⁷⁾。全体としては比較的少数であるが、テレビ視聴の活動的動因が消極的な性質に変化する兆ざしを暗示している。

「転換点」以前のメディア行動の特徴

第二次静岡調査では前述のように14の番組タイプと16の受け手特性との間に一般化しうるような関係を見出すことができなかった。そこで受け手特性のそれぞれについて、“よい—わるい”の次元で2分し、番組の選択数との関係をしらべたところ、次のような結果がみとめられた。

(1) だいたいにおいて、好ましい特性をもつ児童はしからざる児童よりも多種類の番組タイプを選択する傾向があり、この傾向は5年男子においてかなりはっきりみとめられる（サイン・テスト $p < .1$ ）。

(2) 番組選択数で有意差のある受け手特性は次のとおりで有意差の方向はどの特性においても一貫していて、よい群がわるい群より選択数が多い。

	小5(男)	小5(女)	小	(中1男)	(中1女)	中1	男	女
知能			$g \gg b$	$g \gg b$			$g \gg b$	
逃避傾向		$g > b$	$g > b$					
*欲求不満 内罰方向		$p < .05$						$p < .01$
受動性	$g > b$		$g > b$				$g \gg b$	
**他者依 存型			$g > b$		$g \gg b$			
両親の学 歴	$g \gg b$						$g > b$	
家庭の文 化環境	$g \gg b$		$g \gg b$				$g > b$	

注) $g = \text{good}$, $b = \text{bad}$, $>$ 印は5%水準, \gg 印は1%水準の有意差を表わす。

学年のみを記したのは男女をこみにし、性のみを記したのは両学年をこみにして、サイン・テストを行なったもの。

* 内罰方向のよわい群はつよい群より選択数が多い。

** 放送局にたいする要求の有無、程度を指標したもの。これらの特性の指標については、第二次静岡調査報告IXを参照されたい。

すなわち、知能、両親の学歴、文化環境のそれぞれ高い群は低い群に比べて番組選択の巾が広く、また逃避傾向、受動性、番組に関して放送局への依存性がそれぞれ高い群は低い群に比べて番組選択の巾がせまいのである。

14の番組タイプ中、教養的と考えられるもの5、娯楽的と考えられるもの9で、選択の範囲が広いということは、娯楽系の番組のみにかたよらず、報道その他教養系の番組をも見ていることを示唆する。事実そういう傾向が見られる。しかし一方、娯楽系に属する探偵スリラー、クイズ、スポーツ等においても、わるい特性よりもよい特性と結びつくケースがむしろ多いのである。例えば、探偵スリラーは家庭の文化環境の高い群（中1男女）、両親の学歴の高い群（中1女）、知能の高い群（小5女）のほうが、それぞれの低い群よりもよく見ている⁽³³⁾。

この結果は、児童が空想志向型の番組を視聴するのは、必しも逃避的な気晴しのためでないことを暗示している。思うに、未来志向の社会規範の作用因であると想像される高い知能、高い文化環境、両親の高い学歴等が、空想志向行動にたいして禁止的にはたらくのは、“転換点”以後であろう。それ以後の時期には内的成熟によって興味の領域がひろがり、印刷メディアをよみこなす能力ができ、価値観や生活信条が内面化され定着するので、これらの要因がメディア行動の選択につよく作用する。しかし未成熟の年代では、のちに禁止的作用因となる諸要因の力がよわく、一方テレビの提供する空想世界が児童の興味を満足させるだけでなく、興味の発達にたいして促進的にはたらく。このような解釈をしないと、上述の結果を説明することができない。学年性別にわけた4群中テレビをもっともよく見る5年男子において特性の“よい-わるい”と選択範囲の結び付きがある程度つよいということに注目したいのである。

仲間集団と家族集団

先述のように第二次静岡調査では、児童の選択視聴に関連する変数とし

て、性格的特性についてはかなり多くの側面についてしらべているか、集団規範という重要な変数については追及していない。森・杉原（当時広島大学，1960）は、テレビ番組の視聴について準拠枠（frame of reference）を家族におくか、それとも仲間におくかによって、番組の好みがちがうことを、女子中学生について明らかにしている。準拠の指標は次の問いにたいする答えを組合せてつくったものである。(1) テレビで見たことがらについて家人、友人、教師のいずれと話しやすいか。(2) 仲間の話題になっている番組を家の人から見ないほうがよいといわれたらどうするか。(3) テレビで見たことがらについて家人、友人、教師と話し合う頻度。その結果、家族集団は教養的な番組を好む比率が仲間集団より多く、仲間集団は娯楽番組を好む比率が家族集団より多いことを発見した⁽³⁹⁾、二つの番組類型の分類についても受け手の嗜好因子を統計学的分析により求めていること等、操作的レベルの高い研究であるが、Rileys の場合と接近の手順がだいぶちがうので、両者の結果を直接比較することはできない。

広島調査の結果は、Rileys における家族集団は仲間集団より活劇を好むという結果と一見相反している。しかし Rileys の家族集団とは遊び仲間をあまりもたない児童を指示しているのにたいし、広島の場合、家族集団といっているのは、テレビ視聴に関し家人に準拠する集団であって、遊び仲間の有無には触れていない。Rileys はさらに家族集団を両親の価値観を共有するものと仲間のそれを志向するものとのわけ、後者に活劇を好むものが特に多いことを示したのち、その理由として、学校の成績、勉強、趣味活動に関して両親の抱負とのくいちがいからおこる緊張感が存在することを立証している。しかし広島の場合このようなメカニズムを追及していない。広島調査における仲間集団が娯楽型の番組を好む理由について、テレビ番組の選択における家人との対立から生じる“うっぶん”を晴らすためにスクリーンの空想世界に逃避するという解釈もなりたつだろうが、事実上仲間集団の話題に加わりたいという単純な欲求にもとづくものかもしれない。番組選択における家人とのくいちがいをもっと根の深い社

会規範や物の見方における価値の対立に由来するものか否かについては、分折されていないのである。要するに広島調査ではっきりしているのは、テレビ視聴に関し仲間に同調する集団は、家人に同調する集団に比べると、娯楽番組を好むものが多く、教養的番組を好むものが少ないということだけである。

関西大学の広田・永井（1961）は、京都市の中学校9校の1，2，3年男女を対象として、テレビにたいする接触習慣に関する多角的調査を実施し、その一連の調査の中で、Rileysの追試を行なっている。準拠の指標を、集団にたいする魅力、一体感、規範同調、役割行動など、日常生活における9つの場面に求めて尺度化し、準拠集団を家族と仲間の2つに分けて、習慣的に見るテレビ番組を比較しているが、予想された結果は出なかった⁽⁴⁰⁾。

		習慣的視聴番組		
		攻撃—英雄型の番組	その他	N
男子	友人に準拠するもの	60%	40%	42
	家族 //	62%	38%	22
女子	友人に準拠するもの	30%	70%	22
	家族 //	34%	66%	19

(注) 原著では視聴番組を「攻撃—英雄型」「ドラマ・クイズ・即興・社会・教養」「その他」のタイプに分け、男女別に χ^2 テストをしている(n. s.)。

ただし“友人に準拠するもの”とは Rileys の場合は、前述のとおり仲間には入れないのに、仲間集団の規範に同調する児童を指すのにたいし、ここでは仲間の有無を区別していない。逃避説の立場から“攻撃—英雄型”の選択視聴を説明しようとするならば、“緊張”は重要な仲介変数であり、所属する仲間集団の規範に同調するものと、所属しない仲間集団のそれに同調するものとの区別は“緊張”の程度を暗示する重要な指標である。

京都調査では、この対人関係からくる緊張を別の角度から間接にとらえている。学級集団のソシオ・マトリックスにもとづいて、各学級から安定した地位にあるリーダー群と孤立者群とを抽出し、攻撃—英雄型の習慣的

視聴者の比率を比べると、男女とも孤立者群はこのタイプの番組を視聴するものが多い。

		攻撃—英雄型	その他	N
男子	リーダー	45 %	55 %	26
	孤立者	66 %	34 %	22
女子	リーダー	34 %	66 %	15
	孤立者	51 %	49 %	17

(注) 原著では視聴番組を、前述の3タイプにわけ、 χ^2 テスト (2×3) の結果、男女とも $p < 0.2$ で、有意差ありといている。

また、仲間集団を準拠集団とするもののうち、12名の孤立者群をとりだして、視聴番組をしらべると、約 $2/3$ が攻撃—英雄型の番組を見ており、他の群との間に有意差があるという⁽⁴¹⁾。孤立者群は対人緊張がつよいので、空想の英雄の世界に逃避するというわけである。この孤立者群は Rileys の仲間準拠する家族集団にがいとうするもので、両者の結果は符合している。広島調査と京都調査とでは準拠枠の指標がことなるし、仲間準拠する集団といっても Rileys のそれとは指示するものがちがうので、データの比較は困難であるが、要するに重要な点是对人関係の緊張の有無、程度にあるように思われる。

京都調査ではまた、矢田部・ギルフォード性格検査を使用して、情緒不安定で社会的不適応に傾むく群は、他の群に比べて攻撃—英雄型の番組を視聴する比率が有意に高いことを示している⁽⁴²⁾。この結果は緊張のはげぐちを求めてテレビに逃避するという考え方を支持する。

京都調査においては、さらにまた学級集団内のコミュニケーションによって選択視聴が行われることを示すデータをだしている。各学級で人気のあるテレビ番組についてコミュニケーションの通路をソシオマトリック・テストでしらべたところ、視聴番組が孤立して選択される事例はほとんどなく、集団成員の相互的あるいは一方的コミュニケーションによることが多いというのである⁽⁴³⁾。

大阪府科学教育センター (1962) の調査では、府下12校の中学2,3年

男女を対象として、「オモテ文化型」と「ウラ文化型」の視聴番組を比較しているが、この結果も緊張—逃避説を支持するように思われる。「オモテ」「ウラ」の指標は、(1) 知能、学校の成績、家庭環境、行為などに関する教師の評価と、(2) 生徒の自己評価による学校にたいする態度と、(3) 進学希望か就職希望かについての三次元の尺度を組み合わせて作られたもので、要するに、学校にたいする適応性の程度を示す測度と考えてよいだろう。牛島性格検査によると両文化型の得点に有意差があり、オモテ文化型は性格的に問題の少ないグループであると云っている。そしてオモテ文化型はスポーツ、報道、教養番組を、ウラ文化型はスリラー、西部劇、歌謡番組を相対的によく見ているという。また「試験勉強の前日でもみないと気がすまない番組があるか」とたずね、それにたいする肯定的回答の比率を、テレビにたいする“密着度”の測度と考え、両文化型を比べると、オモテ文化型の10%にたいし、ウラ文化型では19%で、テレビへの執着がつよいことをあきらかにしている⁽⁴⁴⁾。

大阪調査における「オモテ文化型」と「ウラ文化型」は広島調査における家族集団と仲間集団によく似た特性をもっている。広島調査において両集団にたいし、「仲間の話題になっている番組を先生から見ないほうがよいといわれたらどうするか」とたずねているが、先生にしたがうと答えたものは、家族集団では87%もいるのに、仲間集団では20%しかいない。つまり、少なくともテレビ視聴に関して、家族に準拠する集団は家人はもちろん教師の意見にも同調する傾向が強いのにたいし、仲間に準拠する集団は家人や教師の意見よりも仲間の話題を尊重する傾向がつよいのであって、学校への適応性も前者は後者より高いのではないかと想像されるのである。

ともあれ、広島調査における“仲間集団”とは、テレビを話題として話し合う仲間、いわば“テレビ仲間”のことである。大阪調査において、ウラ文化型には友人にすすめたい番組があるという生徒が多く、その番組の主なものはスリラー(21%)西部劇(18%)であり、推せん理由として、

「おもしろいから」「あとでみんなと話し合えるから」と答えるものが多い。一方、オモテ文化型では教養番組やホーム・ドラマを「ためになるから」という理由で推せんするものが多い。そして、オモテ文化型では集団の成立、維持に関し、テレビ視聴を条件としていないが、ウラ文化型では集団成立の重要条件の一つになっているという。それだけの断定を下すのに十分な資料はそろっていないが、示唆にとむ仮説である。

日本におけるこの三つの調査を要約すると、学校生活に不適応傾向を示すウラ文化型、情緒不安定-社会的不適応群、あるいは学級集団における孤立者群は、アクション・スリラーを好み、“テレビ仲間”は娯楽番組を好むということになる。“テレビ仲間”と“ウラ文化型”はテレビが仲間集団の重要な話題となっているという点で共通している。その意味では、テレビ視聴は社会的有用性をもつわけだが、Rileysの仲間集団におけるそれとは若干趣きを異にしている。前者の場合は単なる話題のレベルにとどまっているが、後者の場合はテレビで見たことを集団活動に利用するという、より高次の社会的レベルで利用しているのである。

広島、京都、大阪における上述の調査結果は、静岡のそれと外見上一貫性を欠くようであるが、“成熟”の概念を導入すると整合できるように思われる。静岡調査の被験者はいわゆる“転換点”以前ないしその時期にはいりかけた児童（小5，中1）であるのにたいし、広島、京都の調査は中学1年から3年までを含み、大阪調査は中学2,3年生である。メディア行動に“含らみ”のある転換期以前では、アクション・スリラーその他娯楽番組の愛好と知的能力、性格傾向、親子関係などとの間に特別な結びつきがなく、どちらかといえば、好ましい特性をそなえた児童は番組の好みの幅が広いのは（5年男子の場合）、メディアの空想内容志向にたいする抑制作用がまだよわく、このような時期における興味の正常な発達を示すものと考えることができる。これにたいしてあとの三つの調査において、友人関係あるいはある種の性格特性において、テレビ番組の視聴パターンと結びつきがあるという結果がでていいるのは、社会的成熟にともなって空想志

向にたいする抑制作用が強化されるからだと解釈することができよう。児童がテレビを見たがる理由の中には、単におもしろいとかスリルがあるとかいうことのほかに、遊び仲間に共通な話題を求めるといった欲求が存在することは諸調査の示唆するところである。その意味ではテレビ視聴は“社会的有用性”をもつわけであるが、大阪や広島調査が示唆するそうしたテレビの機能は Rileys のそれと若干ちがうことについては前述した。

外的変数：居住条件と視聴統制

テレビ視聴行動の背後に動因を頂点とする諸要因のハイラーキーを仮定し、客観的資料によって、その一部のメカニズムをあきらかにしたが、ひるがえって、視聴行動を誘発する外的条件について考えてみよう。

さきに引用の京都調査では、愛好する番組について、その選択の動機を多肢選択法でたずねている。その結果「偶然に見てから」30%、ついで「家の人が見ているから」27%で、家族の居住条件や家族構成がテレビ視聴を規定する重要な要因であることを暗示している。

第二次静岡調査において、学年、男女、知能、家庭の文化環境、親子関係など19の要因について、1%水準で有意な部分相関があったのは a. 「夕方からテレビをつけっぱなしにしておくか」 b. 「テレビのある部屋で勉強するかどうか」 c. 「視聴時刻の統制をうけているかどうか」の要因であった⁽⁴⁵⁾。これだけのデータから居住条件に言及するのは飛躍かもしれないが、b, c は子供部屋があるかどうかなどに関係があるだろうし、a もまた部屋数や家族構成に規定されることが多いだろう。

東京大学の年少児を対象とする調査で、これらの点をしらべているが、部屋数の少ない家族の児童は視聴量が多く、これに反して遊びや勉強する部屋がテレビのある部屋と別になっている場合は、視聴量が少ないという結果がでてくる。そしてこうした居住条件と視聴統制との関係をみると、遊びや勉強をする部屋がテレビのある部屋と同じ場合には、夜おそくまでテレビ視聴を許されている児童が多いのである。

また家族構成について、兄弟の有無、祖父母の有無と視聴量との関係を見ると、幼児男子で兄弟のある児童はしからざるものに比べて多く見ており、祖父母のある児童はしからざるものに比べて視聴量が少ない。後者は、祖父母が子供の遊び相手となる時間が多いためか、あるいは祖父母の好む番組が子供のそれと異なるためではないかと報告者は解釈している⁽⁴⁶⁾。

9都道府県の小・中学生を対象とする文部省調査(1960)において、小家族対大家族、親子のみの二世代対祖父母のいる三世代などについて視聴量の比較をしているが、小、中学生とも有意差はないといっている⁽⁴⁷⁾。ともあれ、居住条件と家人の視聴統制は児童のテレビ視聴量に影響を与える有力な外的要因と考えることができる。

要 約

1. 児童は何故テレビを見るかについて、動因を頂点とする社会的変数のハイラーキーを想定した。

2. Rileys (1951) の研究は、かかる動因として空想志向と社会化された動因が存在し、それらは集団所属、準拠集団、両親との緊張関係等によって規定されることを示唆した。

3. Schramm *et al.* (1961) は、欲求不満-攻撃仮説のもとに空想志向のメカニズムを追求し、その作用因として対人葛藤、社会規範が存在し、さらにそれらは、成熟、知能、所属する社会階層等によって規定されることをあきらかにした。Maccoby (1954) の研究もまた空想志向と欲求不満状態、社会階層とに連関のあることを示している。

4. しかし児童の空想志向をただちに現実の問題からの逃避と考えるならば、異論がある。空想志向には積極的機能と消極的機能があり、年少児にとって空想活動は想像力を刺激し、代理的役割演技によって社会化を促進する作用因であるように思われる。それを証明する直接のデータはないが、間接的データととして、Schramm *et al.*, Himmelweit *et al.*, 静岡市における調査資料の中からいくつかを引用した。

5. 家族集団と仲間集団は児童の選択視聴を規定する重要な変数であることは、わが国における調査においても、だいたいたしかめられた。また児童の視聴行動とくに視聴量を規定する重要な外的変数として、居住条件と両親の視聴統制とが考えられる。

引用文献

- (1) Bogart, L., *The Age of Television*. 1956, 231—274.
- (2) 布留武郎, 放送と児童の問題: アメリカにおける研究概観, NHK 文研調査研究報告第3集, 昭33.
- (3) FURU, T., *Research on Television and the Child in Japan. Studies of Broadcasting No. 3*, NHK's Radio-TV Culture Research Institute, 1965, 51—82.
- (4) Schramm, W., Lyle, J. & Parker, E. B., *Television in the Lives of Our children*. 1961, 79—81.
- (5) 布留武郎, 児童の属性とテレビ視聴量に関する若干の考察, NHK 文研月報, 昭35年8月.
- (6) 布留武郎・稲生和子, 児童の番組視聴パターンと番組選択に関連する要因について, NHK 文研調査研究報告第6集, 昭36.
- (7) 玄永牧子, 日本におけるテレビと児童に関する調査の概観, ICU 放送教育研究集録VI, 1960, 139—162.
- (8) Himmelweit, H. T., Oppenheim, A. N. & Vince, P., *Television and the Child*. 1958, 67—69, 97—104.
- (9) 文部省, 児童生徒のテレビ視聴習慣を規定にする要因, 昭35年度調査報告
- (10) Seago, M. V., *Children's Television Habits and Preferences. Quarterly of Film, Radio & Television*, Winter, 1951, 143—153.
- (11) 宇川勝美, テレビ視聴が児童の校外生活および学業成績におよぼす影響について, 香川大学学芸学部研究報告第1部第13号, 昭35.
- (12) Witty, P. A., *A Tenth yearly Study and Comments on a Decade of Televiewing. Elementary English*, Dec., 1959.
- (13) 依田新編, テレビジョンの児童に及ぼす影響, 昭39, 223—231.
- (14) Riley, M. W. & Riley J. W. Jr., *A Sociological approach to communication Research. Public Opinion Quarterly*, Fall 1951, 445—460.
- (15) 布留武郎・稲生和子, 前掲(6).
- (16) 布留武郎, 前掲(5).

- (17) Schramm *et al.*, *op. cit.*, 34, 79—82, 122, 226.
- (18) Riley M. W., & Riley J. W. Jr. *op. cit.*, 445—460.
- (19) Riley, M. W. & Flowerman, S., Group Relations as a Variable in Communication's Research. *American Sociological Review*, April 1951, 144—180.
- (20) Riley, J. W. Jr. & Riley M. W., Mass Communication and the Social System, In *Sociology Today*, ed. by Merton *et al.*, 1959, 537—578.
- (21) Maccoby, E. E., Why do Children Watch Television?, *Pub. Opin. Quart.*, 1954, 18, 239—244.
- (22) Bailyn, L., Mass Media & Children: A Study of Exposure Habits and Cognitive Effects. *Psych. Monogr.*, 1959, 73, 1—48.
- (23) Schramm *et al.*, *op. cit.*, 60—65.
- (24) ——— , 99—101.
- (25) ——— , 118—134, 289—294.
- (26) ——— , 98—117, 280—288.
- (27) Rileys, *op. cit.*, (14). 457.
- (28) Schramm *et al.*, *op. cit.*, 57.
- (29) ——— , 57, 58.
- (30) ——— , 36.
- (31) ——— , 220, 221, 290.
- (32) ——— , 76—78.
- (33) Himmelweit *et al.*, *op. cit.*, 352—362.
- (34) Furu, T., *Television and Children's Life: A before and after Study*. NHK's Radio-TV Culture Research Inst., 1962.
- (35) Maccoby, E. E., *op. cit.*, 239—244.
- (36) 田中熊次郎, 興味の発達. 波多野・依田編, 児童心理学ハンドブック, 昭34, 313—336.
- (37) 布留武郎・辻功, テレビに対する児童の接触態度. NHK 文研月報, 昭35年9月.
- (38) 布留武郎・稲生和子, 前掲 (6).
- (39) 森ひろし・杉原昌典, マス・コミの受け手と準拠集団. 中国四国教育学会教育学研究紀要, 第6号, 昭35.
- (40) 広田君美・永井千尋, TVに対する接触習慣の一調査研究その1. 関西大学新聞学研究第9号.
- (41) ——— , 同上.

- (42) _____ , 同上.
- (43) _____ , 同上.
- (44) 大阪府科学教育センター, テレビジョンの児童・生徒に与える影響 (3):
テレビジョン視聴と学校文化型. 昭37年6月.
- (45) 布留武郎, 児童のテレビ視聴に関する要因の分析, NHK 文研, 昭36.
- (46) 依田新編, 前掲 (13), 223—231.
- (47) 文部省, 幼児の生活に及ぼすテレビジョンの影響. 昭36・37年度調査報告.

(あとがき): 本稿にはさきに出版された NHK 総合放送文化研究所編「放送教育の研究と理論」の第4章第3節と重複する部分がある。後者は本稿をもとにして一般向けに書かれたものであるが、印刷の都合でさきに出版されたことをことわっておく。

Why do Children Watch Television?

: Variables Which Predict Media Behavior

Takeo Furu

Schramm and his colleagues (1961) classified the reasons of children's TV viewing into three categories such as passive pleasure (fantasy seeking), information gains (incidental learning) and social utility (purposeful learning), and stated that "the first of these bulks many times the size of the second, and the second is larger than the third,..... ."

They made clear a mechanism of TV viewing as a passive pleasure by an elaborate procedure of approach. It seems, however, there is a question upon their use of "passive pleasure" and "fantasy seeking" as a synonym. According to them, the passive pleasure means "taking part vicariously in thrill play" and "getting away from real-life problems and escaping real-life boredom", etc. Evidently there are many such cases in fantasy seeking. However, it seems that fantasy seeking of children is not essentially based on such an escapist mechanism, but rather a normal activity. Children before the teen age do not fully perceive social norms nor are they so strictly tied down by the norms imposed by their parents. They are in a period of unrestrained growth, and as they mature socially their range of interest is expanded and their information is enlarge. For the normal children in this period fantasy seeking helps to facilitate and amplify imagination. To them this seeking itself is a pleasant activity.

Although there are not direct data on normal fantasy seeking, the following findings can be mentioned as indirect data.

1. According to the research by Schramm, *et al.*, the sixth

grade children spend more time in watching TV than the tenth grade children, although fewer children of the sixth grade have conflicts with their parents as compared to the tenth grade children.

2. Their study also revealed that younger children in tele-town gained much information more than those in radio town.

3. Neither the Nuffield Study nor Shizuoka Study which examined children before or just as they reached teen age found any undesirable influence by television though it had been generally expected. If television is used frequently as a means to escape from real life and seek refuge in the world of fantasy, the passive or escapist tendency will be formed or reinforced. However, there has been no evidence which shows such a tendency in the above research findings.

4. In the second survey at Shizuoka we dichotomized children's personality traits and family circumstances separately into two levels of good and bad, and examined relations between those levels and the range of TV-programs preference. As a result, we found children who had good attributes had a wider range of program preference. Such trend was significant among the fifth grade boys who were the heaviest TV viewers among the four sub-groups divided by sex and grade.

5. In the same second Shizuoka survey, 22 per cent of the fifth grade children (31 per cent of the seventh graders) were thinking that they spent too much time watching television. Of this number, 17 per cent (26 per cent of the seventh graders) were thinking that they couldn't do other things because of too much time spent watching television. Also 60 per cent of the fifth grade children stated that they "watched programs even which we do not like", and 27 per cent of them gave as their reason that they "did not have other things to do". Although the number of these children is small as a whole there is an indication of the change from positive (active) to negative (pas-

sive) in the drives which lead them to TV viewing. It can be considered that the change from positive to negative in fantasy seeking occurs around the age of fifth grade. (A more detailed English report on this subject will be given in the *Studies of Broadcasting* 1967, Radio and TV Culture Research Institute, NHK.)